

2011年 9月12日・「AERA」では

詩人は予感していた

警告し続けた原発の罪深さ

17年前。自ら住む町をチェルノブイリに重ねた詩を書いた。

まさか現実になるとは思わず。

詩人が警告し続けた原発の真実。

予感が的中した。

詩が、現実のものとなった。

街路樹の葉が

風に身をゆだねている

それなのに人声のしない都市

人の歩いていない都市

四万五千の人びとが

かくれんぼしている都市

鬼の私は捜しまわる

17年前、チェルノブイリを訪れて書いた「神隠しされた街」。ウクライナの旧プリピャチ市に、自分の住む町を重ね合わせた。プリピャチはチェルノブイリから約3キロ。高レベルの放射性物質で汚染され、全住民が強制退去、町は閉鎖された。

肺は核種のまじった空気を

とりこんだにちがいない

神隠しの街は地上に

いっそうふえるにちがいない

私たちの神隠しは

きょうかもしれない

うしろで

子どもの声がした気がする

ふりむいてもだれもいない

なにかが背筋をぞくつと襲う

広場にひとり立ちつくす

3月11日。福島県南相馬市の詩人、若松丈太郎（76）は自宅でパソコンと向き合っていた。午後2時46分。棚に置いてあった陶器やガラス製品が落ちて割れるのを呆然と見ていた。

悪夢の始まりだった。

12日、福島第一原発1号機で水素爆発。14日に3号機、15日に4号機と連続して爆発。危惧していたことが本当に起きてしまった。

どこか冷めていた

「ほら、自分が言っていたとおりになったじゃないかとは思わなかった。どこか冷めた気持ちで受け止めてもいた」

静かな語り口に、確固たる信念のようなものが滲んでいる。

福島第一原発が稼働した1971年から40年間、原発の危険と東京電力の管理道営のずさんさを詩や評論で警告してきた。

たとえば／一九七八年六月／福島第一原子力発電所から北へ八キロ／福島県双葉郡浪江町南棚塩
／舩倉隆さん宅の庭に咲くムラサキツクサの花びらにピンクの斑点があらわれた／けれど／原発操業との
有意性は認められないとされた

たとえば／一九八〇年六月採取／福島第一原子力発電所から北へ八キロ／福島県双葉郡浪江町幾世橋／小学
校校庭の空気中からコバルト六〇を検出

「みなみ風吹く日」より

市は5エリアに分断

徹底した具象表現。畳みかける事実の積み重ねが、原発の禍々しさをリアルに表出させる。

南相馬は、福島第一原発の北10キロから40キロに位置する。自宅がある原町区は原発から25キロ。「緊急時避難準備区域」に指定され、再び原発から放射性物質が大量に放出される事態になれば、屋内退避か別の場所に避難しなければならない。

7月16日、原発事故後初めて放射線を測る線量計が市から配布された。若松はさっそく自宅周辺を計測した。雨樋の下などでは毎時0.7マイクロシーベルト。低い所では0.4から0.5だった。隣接する浪江町や飯館村に比べれば放射線量は少ない。だが最南端の小高区（旧小高町）は警戒区域で立ち入れない。西部は計画的避難区域、北西側の一部地域は避難を促す特定避難勧奨地点で、市が五つのエリアに分断されている。

常磐線は久ノ浜から亙理まで110キロにわたって不通。国道6号も大獲で寸断。通行できる幹線道路は県道12号1本しかない。電気、ガス、水道などは復旧し、新聞や郵便物などは配達されるものの、原発から30キロ圏内の企業は市外へ移転、工場も閉鎖された。病院も休業し、妊婦や小さな子どもを持つ母親たちは県内外に自主避難した。小中学校と高校に通う子どもたちも30キロ圏外の学校までスクールバスで通う。街中には子どもの姿もあまり見かけない。中心部には、シャッターを下ろした店も多い。7万1千人いた住民は、3万9千人にまで減少した。「町として成り立っていない。原発は日常生活や文化も奪う」と若松は言う。

詩作活動のかたわら、南相馬にゆかりのあった文化人の足跡を明らかにしてきた。『死霊』で知られる埴谷雄高と『死の棟』の島尾敏雄は2人とも小高区が本籍だが、地元でも知らない人が多かった。資料を読み、取材して記録した。その縁で2人の記念文学資料館設立にもかかわった。埴谷の貴重な蔵書のほとんどが収められ、書き込みのある本も相当ある。震災後一度だけ外から確認できた。建物の被害はないものの、蔵書は書架から落ちて散乱していた。いまはそこにも立ち入れない。

南相馬と関係のあったドキュメンタリー映画監督・亀井文夫、日本国憲法の成立にかかわった憲法学者・鈴木安蔵の仕事などにも光を当ててきた。

「古武士のような人。信念を持って生きた人物について書き残してきた。誰からも評価されなくとも、自分が評価するんだと」

親交のある、出版社コールサック社の鈴木比佐雄は、若松のことをそう語る。

見えないものを見る

岩手県で生まれた。小学4年生で終戦。墨塗り教科書を体験し、「人間はそんなに簡単に考えを変えられるのかと疑問に思った。自分で判断し、生きていきたいと考えた」。詩人で作家の金子光晴が昭和12年に書いた「おっとせい」という詩に感動した。皆が同じ方角を向く中で、自分だけが反対を向いている。徒党を組むことを批判した内容だった。戦前にこんなことを考えている人がいたのかと驚き、詩は有効な表現手段ではないかと思った。福島大学で知り合った妻の実家がある南相馬の高校で国語の教師となった。

「若松さんは南相馬市の魅力を異邦人の眼差しで発見し、いつしか真の故郷と感じてこの地を愛し、暮らしの現場から証言してきたのだと思われる」。若松の近著『福島原発難民』に、鈴木はそんな一文を寄せている。それゆえ、文化や暮らしを根底から突き崩す原発を恐れ、その罪深さを警告してきた。

「原発詩人」と見られることは本意ではない。だが原発を避けては通れなかった。若松の詩は、事故が現実となったいま、予言の詩として読み直されている。

若松の書斎には墨痕鮮やかな一枚の書が、額に入れられてある。「闇のなかの黒い馬」。埴谷の著作のタイトルを本人に書いてもらった。見えないものを見ようとする意思を表しているところに惹かれたからだ。

5月末、若松は東京に行き、原発事故がすでに過去のことであるかのような暮らしぶりに居心地の悪さを感じたという。そんな胸の内を率直に語ったエッセイの最後にこう書いた。「いま、わたしたちのまえにあるのは、なにかの始まりなののでしょうか、あるいはなにかの終わりなののでしょうか。そのことを見届けることは文学の存在する意味のひとつでしょう。そのためには、見えないものを見、聞こえないものに耳をかたむけ、感じられないものを感じとることが求められています」

(文中敬称略)

ジャーナリスト 高瀬 毅

と紹介されています。